

芥川龍之介と親鸞：「蜘蛛の糸」の親(おや)性をめぐって

荒木, 正見
日本赤十字九州国際看護大学：教授

<https://hdl.handle.net/2324/1812243>

出版情報：比較思想論輯：比較思想学会福岡支部紀要. 5, pp.1-7, 2003-03-31. 比較思想学会福岡支部
バージョン：
権利関係：



芥川龍之介と親鸞

―「蜘蛛の糸」の親(おや)性をめぐって―

荒木正見

1.

小論は、芥川龍之介「蜘蛛の糸」(大正七年)を親(おや)性による救いという視点から考察するものである。考察は親鸞の思想における親性との比較において行う。

「蜘蛛の糸」の要旨は、一般的には、桑原三郎・千葉俊二編『日本児童文学名作集(下)』(岩波書店、岩波文庫、一九九四年)における解説、「他者を押し退けても自分だけ救われようとする人間の醜いエゴイズムを描いたもの」(千葉俊二・二九二頁)というものがその典型である。当解説ではさらに、「天上の極楽から地獄の底へ垂直にたれ下った一本の蜘蛛の糸、それを下から上に一心によじのぼろうとする健陀多。そこにはどこか明治期以来の私たち日本人の心を強く規制し、一途な上昇志向を是としてきた立身出世のイメージが強くつきまとっているとはいえないであろうか。」(二九二頁)と歴史的社会的側面への考察可能性をも開示している。小論はこのような考察における蜘蛛の糸をよじ登ろうとする形象に手がかりを得つつ、さらにその根底に横たわる当時の日本人における元型的発想としての仏教観と芥川龍之介自身の内面的な共鳴とを探る試みである。

「蜘蛛の糸」が表向き仏教的な姿をしていながら、その世界が仏教的世界とはかけ離れた構造であることを指摘した論文として、吉原浩人「仏教的世界観との懸隔と地獄の形象」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九六年四月号、學燈社、八八―九三頁)が挙げられる。当論文では、原拠探求の歴史を辿り、今日では定説となったポール・ケーラスの「カ

ルマ」に至って、「インドの話を装っているものの、決して仏典では有り得ない話」(八九頁)としてキリスト教的世界観に基づくものであったと述べられる。その上で、仏教における地獄と極楽の構造は対比構造や空間的に上下に連続しているものではないことが論証されている。それにも関わらず、作者芥川龍之介や、「蜘蛛の糸」の読者が、なんとなく小説の設定を承認してしまっていることに對して当論文では、古くは『往生要集』や浄土教の強い影響から(九二頁)、さらに明治期に「キリスト教の地獄と天国の概念も導入され」(九二頁)人界の下に地獄、上に天国という図式を容認するようになったとされている。当論文ではさらに、「大正七年の芥川においては、仏教とキリスト教における地獄の問題を、共通するテーマとして抱えていたと看取できる。」(九二頁)とし、しかし、両者の地獄観の相違は意識せず、そのような「芥川の仏教的世界観への理解不足」(九二頁)が、両宗教の対立を扱った「邪宗門」の自壊に繋がったと結んでいる。

小論ではまず、この論文の論旨、すなわち「蜘蛛の糸」にはキリスト教的な世界観が反映しているという点に關しては大きな枠組みとして認めつつも、この論文でも触れられているように、仏教的世界観にも同様の発想はありうるのではないかという問いが生じることから出發する。

この論文は表面的には地獄極楽の空間構造を論じたものであるが、空間構造の比較に託して、連続的な仏教観と分断的なキリスト教観という比較を示唆していることは、仏教の輪廻転生を取り上げて両宗教を比較していることから明らかである。

これに對して小論でもそのことをおおむね認めるが、「浄土教の強い影響」と述べられたことに關しては、より詳細な考察が必要である。

まず、この極楽を歩き、救済しようとする仏陀のイメージは阿弥陀如来にほかならないのでそのように理解しなければならない。すなわち仏教經典においては、釈迦は、時と場合において、他の諸仏の属性をもつ

て出現する。たとえば、小論でも用いる「親無量寿経」において、苦しむ人を救いに現れる姿は阿弥陀如来のイメージだとされる。

また、極楽―地獄の分断的対比に関しては江戸時代に、勢力的にも、また庶民の潜在意識的にも大きな影響を与え、「悪人正機説」にみられるような連続的な仏教観の典型のように言われる親鸞の思想を振り返ってみても、必ずしも分断的な側面が皆無とはいえないのではないかと思われる。すなわち、吉原論文におけるようなキリスト教的な世界観を仏教のものと置き換えやすい背景が、仏教の側にもあるのではないか。このような問題意識のもとで、小論では「蜘蛛の糸」を、庶民的な仏教の典型としての親鸞の思想と比較しつつ論述する。

このことはテキスト解釈の立場から、次のような問題意識に立つことをも意味する。すなわち今「蜘蛛の糸」の読者たちは必ずしもキリスト教の宇宙観に親しんでいるわけでもないにも関わらず、これまで素朴に「蜘蛛の糸」を受容してきたが、それこそが、読者の潜在的な意識において浄土教によって作られてきた伝統的な宇宙構造を認めていたからではないかという問いである。そしてまずなによりも、作者自身が仏教的色彩の濃い作品にしているのである。小論は、作品が作者の手を離れた瞬間に起こったと推測されるこのような読まれ方の起源を考察する試みでもある。

さらに小論においては、考察の手がかりとして「親性」という概念を導入する。すなわち、上記のような仏教的背景のもうひとつ奥に、作者のさらに原初的な葛藤があり、その葛藤は幼時から育て上げられてきた内面的な親たるものや親の本質についてのイメージ、すなわち親性に対する葛藤ではないか、それが、仏教的な背景と重なるのではないかというのが、小論で論じていくひとつの要点でもある。

それに親鸞が関わるのは、実は、親鸞は仏陀（悟りを開いた人）を親と読み替えているし、それは仏教においては一般的な考え方だからである。また、後に述べるようにそれは親鸞の思想形成にとって本質的な問

題だからである。

なお、主要なテキストのひとつとして「歎異抄」を用いるが、山折哲雄『悪と往生 親鸞を裏切る『歎異抄』』（中央公論社、二〇〇〇年）などで典型的に述べられるように、それは筆者とされる弟子唯円独自の思想が反映されている可能性もある。しかし一般に流布している状況からは親鸞に対する一般の受け止め方を象徴していると解してよい。また、親鸞その人の思想については、「教行信証」ほかを参照する。

2.

名畑應順校注『親鸞和讃集』（岩波書店、岩波文庫、一九七六年）で、「釈迦・弥陀は慈悲の父母（ふも）」「釈迦は父なり弥陀は母なり」と（と給へり）」（二二〇頁）と述べられるように、親鸞において仏陀は、そして特に釈迦と阿弥陀とは親のイメージをもって捉えられている。そのうち極楽を歩いているのにふさわしいのは、先の吉原論文に述べられるように阿弥陀如来だといえる（八九頁）。しかしここはイメージ的に阿弥陀如来と釈迦如来とを混同するのも一般読者にありがちである。それは、阿弥陀如来に限らず、一般に此岸の中心的伝道者たる釈迦に諸仏のイメージを託しがちだし、後述するように、仏教經典の解釈において、それは常識でもある。そこで双方をもつて「親」となし、極楽を歩く姿を与え、読者も知らぬ間に納得していたということができよう。

このように姿を与えられた「蜘蛛の糸」のお釈迦様は、「救う」という行為をもって特徴付けられている。すなわち、極楽の表現や「救う」という特性との全体はやはり阿弥陀如来を示唆しているといえる。

一般的に、親鸞において阿弥陀如来は絶対的な救いを約束しているとされる。

その典型的なものが「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」（金子大栄校注『歎異抄』岩波書店、岩波文庫、一九三一年／二〇〇〇年、四五頁）とされる悪人正機説であることはいうまでもない。なぜ悪

人なのに救われるかといえ、それは、「自力作善（じりきさぜん）」のひととは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。」（『歎異抄』四五頁）とされるように、善人はとかく自分に頼るが、自分が劣っているとしたすら阿弥陀如来にすがろうとする悪人はまさに阿弥陀如来の、すべてを救おうという本願になっっているからだし、また、「よきころのをこるも、宿業のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるゝも、悪業のはからふゆへなり。」（『歎異抄』六五頁）とされるように、善悪は宿業であり個人の責任ではないという背景があるからである。

このように、親鸞は阿弥陀如来を親として、「歎異抄」においてはそれも絶対的かつ無条件な救いを与えてくれるものとしてイメージしているといえる。

もちろんそうであるならば、「蜘蛛の糸」のお釈迦様は、阿弥陀如来と読み替え、さらに親性と読み替えて、健陀多は救われなければならない。

そして、救われない理由のひとつにキリスト教的世界観や救済観があることはすでに吉原論文をはじめとする研究が明らかにするとおりであるが、では、親鸞の思想には「救われぬ」という側面は皆無なのであるか。次節ではそれを考察する。

3.

救う、救われるという視点から「歎異抄」を注意深く読むと、以下の各点において救われぬ立場があるようにも感じられる。

まず先の悪人正機説における善人の立場である。

自力作善、すなわち自分の力で善を為す場合には、阿弥陀の本願としての絶対的な救いから遠ざかるというのがこの不幸な善人なのである。では何もしないでいればよいのかというとそうでもない。「歎異抄」の冒頭では、「弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をばとぐる

なりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち摂取不捨の利益（りやく）にあずけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪（ぜんまく）のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。」（『本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆへに、悪をもおそるべからず』『歎異抄』四〇（四一頁）、すなわち、阿弥陀如来の万物を救いたいとする誓願が助けてくださったであれこれ思い巡らせることなく極楽往生に至るのだと信じ、念仏を唱えようと思ひ立つ心が起こりさえすれば、阿弥陀如来の、すべてを掬い取って救済するという利益にあずかることができる、と述べられるように、信じることで、その実践として念仏を唱えることが重要な条件になっている。ここは、阿弥陀如来の側から救いを述べる箇所ではあるが、救われる側から言えば、阿弥陀如来を信じなくて念仏を唱えなければ救われぬといえなくもない。いま、「蜘蛛の糸」を顧みると、健陀多がお釈迦様の救いを疑った瞬間に糸が切れたのであるから、この信じるというのは「歎異抄」「蜘蛛の糸」の双方にとって重要な要素であるといえる。――もちろんこの作品においては、健陀多自身は蜘蛛の糸がお釈迦様の救いだとは知らないが、お釈迦様の論理すなわち全宇宙の因果からは、お釈迦様の救いを疑ったということになるのである。

しかもその念仏は「念仏には無義をもて義とす。」（『歎異抄』五六頁）、すなわち、あれこれと考えず、素直に唱えるべきだというほどに、考えることを排している。これは、「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教（しょうぎょう）」は、本願を信じ念仏をまうさば仏になる。」（『歎異抄』六〇（六一頁）と、他の宗派に対抗して述べるという意味もあるが、比較論的にいえば、それこそが親鸞の本質を突いているといえる。

このように「歎異抄」からは、阿弥陀如来を信じるか否か、すなわち他力に委ねるか否かという点で、「蜘蛛の糸」の健陀多がお釈迦様を疑ったことで墜落したと類比をみることができ。この疑いは双方とも、単に個としての阿弥陀や釈迦を信じるか否かというように見えつつ、

実は、全宇宙における因果の網に基づく宿業によって定められているものであり絶対的な性格を持つ。もちろん一般的に読み取れるように、「蜘蛛の糸」の表面的なテーマとしてはエゴイズムの悲劇を最優先に挙げなければならぬが、そのテーマが成立する舞台にはこのような絶対的救いの図式があり、憐れみの行為と悲劇はその図式に基づいて起こっていることを見すごしてはならないであろう。このことは、芥川龍之介そのものに、宿命的、絶対的に救われないという図式、すなわち一種の強いニヒリズムがあることにもなる。

佐藤泰正「芥川龍之介の児童文学」「蜘蛛の糸」小論『国文学』——
解釈と教材の研究——特集・児童文学の魅惑昭和四十六年十一月号、學燈社、九七—一〇一頁）は、小論文ながら、この作品の主題を「救われたい我執に苦しむ「人間の悲しさ」への「いとおし」み」（九九頁）という一般的な理解から文字通りに断ち切って、「この一条の糸とは（中略）作者の胸中を吹き荒れる虚無の、眼前に映し出された一片の象徴とも言うべきものであろう。」（九九頁）として、それまでの解釈に一石を投じた古典ともいえるべき論文であるが、小論の考察からもそのような絶対的なニヒリズムへと至るのである。

4.

さて、そのニヒリズムの内容にもう少し深入りする。

「歎異抄」のこの救いの図式は、念仏をこそ唱えよという宗教的実践においては有効だが、「歎異抄」が親鸞の弟子によって、しかも宗教的実践という目的のために編まれたことを思えば、さらに親鸞その人の思想的背景を再検討しなければならない。小論のテーマからそのことを考えれば、やはり親鸞自身の著作「教行信証」の冒頭（開巻劈頭や序「顕浄土真実教行証文類序（けんじょうどしんじちきようもんしようもんるいのじよ）」に記されるように、浄土教というものは、本来、阿闍世（あじやせ）の逆悪を機縁として成立したものとされている（親鸞・金子

大栄校訂『教行信証』岩波書店、岩波文庫、一九五七年／二〇〇一年）の考察の手がかりになる。

阿闍世の逆悪というまでもなく、「涅槃經」「觀無量壽經」などに記されるいわゆる王舎城の悲劇を指す。それは紀元前五〜六世紀にわたって生きた釈迦が靈鷲山で説教している頃、麓の王舎城で起こった皇太子阿闍世を主人公とする悲劇とその救いである。

まず時間的には「涅槃經」に記される因縁に遡る。阿闍世の父、頻婆娑羅王（びんばしやらおう）には世継ぎのこどもがいなかったため、占いに相談したところ、山中で修業しているひとりの仙人があと三年で寿命が尽きる。すると輪廻転生して王の子どもとして生まれ変わる、という予言を受ける。そこで王はすぐさまその仙人を殺し、予言どおりにひとりの男子を得る。後の韋提希（いだいけ）は、悪業の結果を恐れて生まれた子どもを高殿から突き落とすが、子どもは指一本を失っただけで命をとりとめ、皇太子阿闍世と成長する。

その因縁から悲劇が生じる。「觀無量壽經」によると、阿闍世は、悪友調達（じようだつ）提婆達多（だいばだつた）にそそのかされて、過去の父の所業を知り、それゆえに父頻婆娑羅王（びんばしやらおう）を幽閉し食物を絶つ。しかし、後の韋提希（いだいけ）が身体に食物を塗りつけて訪問し、釈迦が弟子目犍連（もくけんれん）を通じて八戒を授け、また尊者富楼那（ふるな）を遣わして法を説くために、王が心身とも健やかに生き延びていることを知り、阿闍世はさらに母をも殺そうとする。しかし聡明な家臣たちに諫められて思いとどまり幽閉する。韋提希は憔悴し、はるかな釈迦に向かって救いを求める。釈迦は二名の弟子、目犍連を左、阿難（あなん）を右に侍らせ、百宝の蓮華に座して、韋提希の前に姿を現す。この図は、坂東性純『浄土三部經の真実』（NHK出版、一九九五年／一九九八年）にも述べられるように（二六五頁）、阿弥陀如来と一体になった釈迦如来を象徴しているとされる。当初韋提希は、自分は過去のどのような罪でこんな悪い子を産んだのか、などと

嘆くが、やがて、阿弥陀仏の極楽世界を希求し、釈迦の説く、専心に浄土を想う方法「十三観」を学び、さらに浄土に往生する上品上生（じょうぼんじょうしやう）から下品下生までの九種の方法を得、心の底から救われるのである。『大正新修大蔵経 第十二巻』大正一切経刊行会、大正一四年、三四〇〜三四六頁。中村元・早島鏡正・紀野一義訳注『浄土三部経（下）』岩波書店、岩波文庫、一九六四年／一九九八年、四三〜八一頁）

また、「大般（だいはつ）涅槃経」によると、その続きとして、父王が殺されたところから述べられる。阿闍世は、父親を殺した後悔から瘡症（偏體瘡）を生じ、その傷は臭くて近づくこともできないようになってしまった。その時、母韋提希が様々な薬を塗るが効果はない。多くの臣下が彼にさまざまなことを述べ、愁苦を和らげようとするが効果はない。そして、大医耆婆（ぎば）の釈迦に帰依せよとの勧めにはじめ叛くが、やがて一層の苦しみを得、それを救おうと現れた釈迦に帰依して救われるのである。『大正新修大蔵経 第十二巻』四七四〜四八五頁）

さて、このような親との葛藤を主要なモチーフにし、その超越を浄土信仰に求めた「教行信証」には、「信巻」に、この「大般涅槃経」のエピソードが丸写しといつてよいほど引用されている。その中では阿闍世の心を和らげ得なかった悪の肯定による癒しの勧めという臣下のエピソードも含まれるのである。『教行信証』一九三〜二三〇頁）

親鸞がこれほど丁寧にこれらの箇所を引用するのは、逆縁を述べておいてそれを超越するという意図の表れだと考えられる。特に、臣下実得（じちとく）『大正新修大蔵経 第十二巻』では実得、「教行信証」では実徳。）に関するエピソードでは、父王が相師に聞いた予言、この子どもが父を殺す、という因果を再確認しているのである。

かくして親鸞は「教行信証」において、このような親子の葛藤を主なモチーフにし、その超越のために念仏を唱え、阿弥陀如来の浄土に至ることを説くのである。

このように、表面的な理論上は、信じ、念仏を唱えることですべては救われるとする「歎異抄」の立場が、「教行信証」において示されているのは、いわば当然である。そして、信じなければ、念仏を唱えなければ救われないという立場も同様である。

しかし、それが膨大な經典のうちで特に阿闍世の逆縁をとりあげて述べられているという点に、「歎異抄」より生々しい親鸞の立場が感じられる。そこから、「歎異抄」第五条「親鸞は、父母（ぶも）の孝養（きやうよう）のためとて、一返にても念仏まうしたること、いまださふらはず。」（『歎異抄』四八頁）を見直すと、現実の父母だけのために念仏するよりは万物のために念仏し解脱を目指すことが真に父母を供養することになる、という理論上の解釈の背後に、阿闍世が当初父母に感じたと同じ、一種断絶的な恨みの情が存在することに気づく。

では、親鸞の親子関係はどうだったのか。親鸞の出生やその存在に関する理論的変遷については菊村紀彦『親鸞 その生涯とこころ』（社会思想社、昭和四三年／昭和五三年）に詳細かつ論理的に述べられ、「誕生は一一七三年（承安三）、富裕とはいえないけれど、藤原一門の公家を父としていたこと、だいたい、京（都）または、その近郊に出生した」（三九頁）とされている。そのうえで、伝えられている一一八一年（養和元）九歳での出家について同書では、直接的な理由はまだ見当たらないが、続いて二人の弟が出家したことや、親鸞出家の前年一一八〇年（治承四）が、源頼朝が伊豆に旗揚げした年だということを考え合わせて、時代の流れの中で没落しつつあった一家の理由による無理な出家であったと推論している（『親鸞 その生涯とこころ』四五〜四六頁）。

もちろん時代背景をいえば、骨肉相食む戦乱の時代であり、布教する親鸞は、一般論としても表面的な親子関係を超越すべく語らねばならなかったことは考えるに易いが、主著のメインモチーフに選ぶことには、このような原初的な親離れ体験があることも重要な要因ではないかと考えられる。それは、救わない親性に対する不信、ひいては最も基底的

な自己存在に対する不信である。もちろんそのような体験は当時多くの子どもが経験したことでもある。親鸞がその後、親鸞たりえたのは、出家後、ナイーブな感性を統合すべく高度の教育を受けたからだということはいまでもない。

このような視点から芥川龍之介を振り返ると奇妙な類似が感じられる。すでに常識になっている芥川龍之介の幼時の状況を手近な資料、関口安義『芥川龍之介』（岩波書店、一九九五年）から列記すると以下の通りである。

芥川龍之介は、一八九二年（明治二五）、新原家の両親の厄年に生まれたため風習に従って形式的に捨て子にされ、それから普通の子どもとして養われるが、生後八ヶ月にして母フクの精神障害により、母の実家芥川家の養子になる（法的には一二歳の時）。龍之介は主にフクの姉、フキによって育てられたが、生涯独身で通したこの伯母は愛情深く、教育熱心であったとされる。また芥川家も文学好きで芸事などを好む雰囲気だったという。（五〜六頁）

親鸞と芥川龍之介がそれぞれ幼時に生家を出なければならなかったのは、いずれも宿命のようなもので、本人の責任ではない。しかし、双方ともそのような逃れられない運命で親と別れなければならなかったことを素直に受容できる年齢ではない。いずれもその後の教育は十分に得られたのだが、それでも修復できないトラウマが生じることは想像するに難くない。

このように、親鸞が、浄土に向かって救われようとする際、乗り越えなければならぬ最大の悪を、阿闍世の逆縁に求めた原初的理由のひとつに、自らの親に対する心の傷があったと推測されるが、芥川龍之介もまた同様であると考えられる。理由はなんであれ、いわゆる「子捨て」に遭ったのが乳児期だというのは、親鸞よりも原初的なトラウマを内包することになる。原初的とは、先に述べた、救わない親性に対する不信、ひいては最も基底的な自己存在に対する不信が、より深く基底的なものと

ろに根付いてしまっていることを意味する。それは、絶対的なニヒリズムである。

かくして、芥川龍之介における親性と自己存在に対する原初的な不信やニヒリズムが最深奥にあり、その受容性が親鸞やキリスト教をはじめとする思想的背景や作品を選択的に作品や生き方へと構成してきたことが推論され、そのひとつの発露が「蜘蛛の糸」における救わない親性だったといえるのである。

なお、「蜘蛛の糸」が発表されたのは、一九一八年（大正七）七月の『赤い鳥』であるが、編者鈴木三重吉がかなり手を加えたことは知られている。両者を比較すると、その改定にはひとつの傾向性がある。それは、芥川龍之介の記述に含まれるお釈迦様や極楽の記述のうち丁寧語で記してあるものから丁寧語を外すという傾向性である。その典型が作品の最後の文である。原作では「極楽ももう午に近くなったのでございませう。」（『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、一九七七年／一九八二年、二三一頁）とあるが、『赤い鳥』では、「極楽ももうお午に近くなりました。」（『日本児童文学名作集（下）』一五頁）とさっぱりしている。いま、上記のもろもろのニヒリズムの視点からこれらの芥川の表記を見ると、その丁寧さがかえってお釈迦様と現実的読者との間に距離を置くものだというところに気づく。鈴木三重吉の美的感覚がそのニヒリズムを感じ取り、手を加えたというのは憶測に過ぎるであろうか。

かくして小論では芥川龍之介の「蜘蛛の糸」において、親としての仏がなぜ見捨てたのかという点に関して、仏教的な背景を探究するという側面から考察した。親鸞という広範な影響力を持った思想の人間的な側面を顧みれば、芥川龍之介の原初的な哀しみに繋がる事は述べてきたとおりである。なお、紙幅の関係上、芥川龍之介自身の仏教体験の詳細、また、キリスト教との思想的輻輳など、小論のテーマに関連した本質的な研究の多くを割愛した。それらをより深く探求することが目下の課題である。

引用参考文献

- 桑原三郎・千葉俊二編『日本児童文学名作集(下)』岩波書店、岩波文庫、一九九四年。
- 吉原浩人「仏教的世界観との懸隔と地獄の形象」『国文学 解釈と教材の研究』一九九六年四月号、學燈社。
- 山折哲雄『悪と往生 親鸞を裏切る『歎異抄』』中央公論社、二〇〇〇年。
- 名畑應順校注『親鸞和讃集』岩波書店、岩波文庫、一九七六年。
- 金子大栄校注『歎異抄』岩波書店、岩波文庫、一九三一年／二〇〇〇年。
- 佐藤泰正「芥川龍之介の児童文学 「蜘蛛の糸」小論」『国文学 解釈と教材の研究』特集・児童文学の魅惑』昭和四六年一月号、學燈社。
- 親鸞・金子大栄校訂『教行信証』岩波書店、岩波文庫、一九五七年／二〇〇一年。
- 坂東性純『浄土三部経の真実』NHK出版、一九九五年／一九九八年。
- 『大正新修大藏經 第十二卷』大正一切経刊行会、大正一四年、三四〇～三四六頁。
- 中村元・早島鏡正・紀野一義訳注『浄土三部経(下)』岩波書店、岩波文庫、一九六四年／一九九八年。
- 菊村紀彦『親鸞 その生涯とこころ』社会思想社、昭和四三年／昭和五三年。
- 関口安義『芥川龍之介』岩波書店、一九九五年。
- 『芥川龍之介全集 第二卷』岩波書店、一九七七年／一九八二年。

*小論は二〇〇二年七月六日、久留米大学で行われた日本比較文学会九州支部二〇〇二年度春季大会に於いて行った口頭発表「芥川龍之介「蜘蛛の糸」における親性 ―親鸞との比較において―」に加筆修正したものである。

[Comparison of AKUTAGAWA Ryunosuke and Simeran about parenthood on *Kumonoito*]

[ARAKI Masami・日本赤十字九州国際看護大学教授・哲学・比較思想]